



表装技術の普及指導と 美術品の収集保存

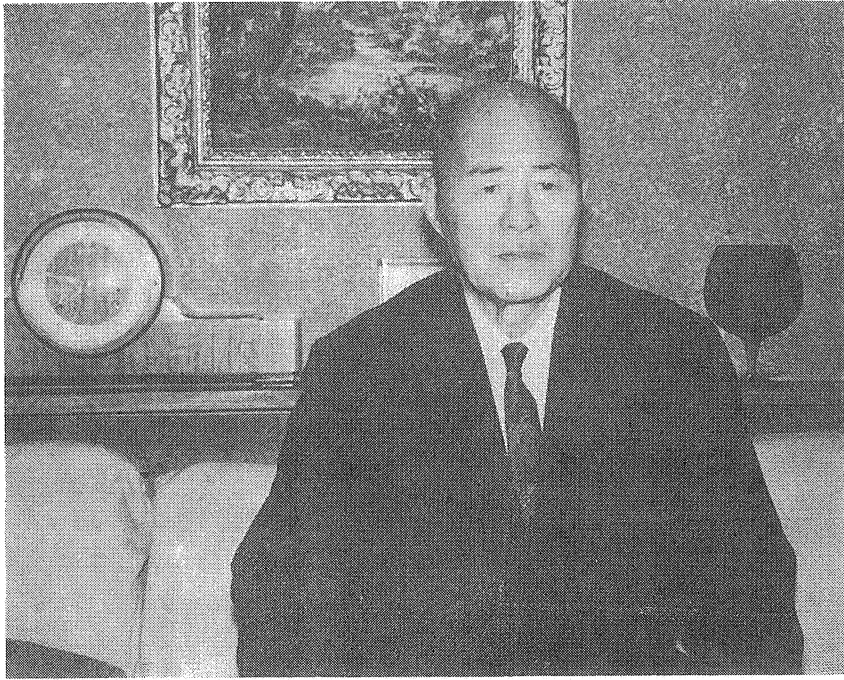
福 地 発 明

(86才)

現住所 秋田市

福地氏は、明治27年秋田市表具屋石井常氏に師事し、以来70年余の長きにわたり、表具の業務に従事し、卓越し

た技能を有し、この間表具組合等の役職を歴任し、表装展の開催、組合員の技術研究会の開催など後進の技術指導に努められるとともに、秋田市浮世絵研究会の結成に尽くしたほか、書画の収集を行ない、秋田市美術館で展覧に供するなど、美術の興隆と社会教育に寄与された。このほか、文化財の修理等その保存に力を尽くし、その技能は高く評価されている。



機械金属工業の振興と中小企業の育成

中 田 儀 直

(78才)

現住所 大館市

中田氏は、大正7年、郷土産業振興を目的として、大館製作所を創立し、製材機、鉦山機械の製作を始め、順次社業も伸長したが、昭和初期よりの数次に亘る、不況の経験から、県内工業者の経営内容の弱体を痛感し、率先これらの団結と改善を呼びかけ、昭和12年組合の連合会を結成し、理事長として受注、金融両面よりの共同開拓に努められるとともに、山積する中小企業、特に県内工業界における経営改善、向上のため献身的な努力を傾注された。この間、戦前戦後にわたり県議会議員、大館町長、衆議院議員等の要職を歴任し地方自治、国政に参与し、巾広い活動を展開しつつこれまで数多くの業績をあげられ県勢の発展に大きく貢献された。



漆器産業の発展と技術普及

阿部健吉

(75才)

現住所 雄勝郡稲川町

阿部氏は、大正13年川連漆器信用組合長として漆器技術の研さんに努めるとともに昭和23年以來秋田県漆器工業協同組合理事長として漆器産業発展のため率先して漆器技術の普及と業界の指導に尽くした。この間戦時の混乱の中で危機にたつた伝統ある漆器産業を救うべく東奔西走し300余名の組合員の先頭にたつてよくその伝統を守り今日の基礎を確立した。特に漆器素地としての原木の入手難には官木の払下げなど新しき道の道を開き、さらには中国産漆の輸入に困難をきたした折も幾度となく上京し、組合員の漆の需要に応じうる体制に努力するなど、本県漆器産業の発展に大きな貢献をされた。



新舞踊の発展と

子女の情操教育

宮 丸 キヨエ

(藤 蔭 季代恵)

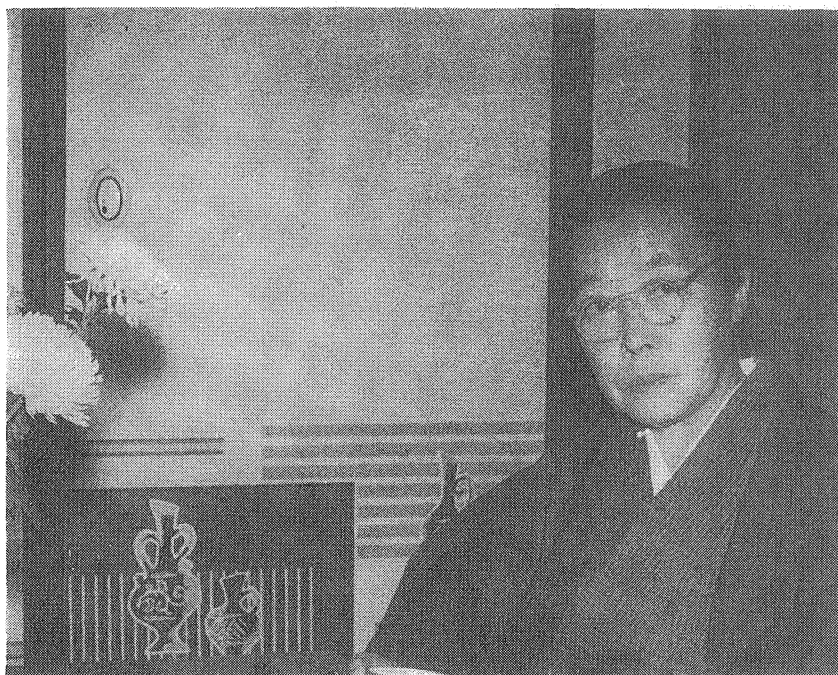
(73才)

現住所 秋田市

宮丸氏は、昭和初期故家元藤蔭静樹
師が新舞踊運動のため藤蔭流を設立し

た趣旨に賛同し、故家元と共に藤蔭流

の幹部となり新舞踊の発展に尽くした。特に秋田県における日本舞踊は、花柳界のみ
であつたが、これの一般大衆化を目途として、子女を対象に普及を図り今日の大衆化
としての舞踊の基礎をつくつたほか、県内各種民謡、小唄などの振付けをなし、観光
にも尽くされた。また、日本舞踊協会秋田県支部長として、本県の日本舞踊発展のた
め貢献された。



社会福祉と婦人の地位向上

富 樫 ツ タ

(70才)

現住所 仙北郡神岡町

富樫氏は、大正11年から昭和6年まで子女の教育に尽されたが、昭和21年以来現在に至るまで、民生委員、児童委員として要保護世帯の更生に尽くし、特に母子世帯の自立更生指導と、要保護児童の福祉に力をそそぎ、子ども会の結成を促進した。また、県内唯一人の婦人総務として民生委員協議会においては事例研究を主として行なうなど委員の資質の向上に努められるなど社会福祉に献身的な努力を続けられている。さらに昭和23年以来、神岡町婦人会長、県地域婦人団体連絡協議会会長、県婦人会館理事長等を歴任し婦人の地位の向上に貢献された。



健苗育成による稲作の安定増収

須 藤 清 治

(69才)

現住所 由利郡金浦町

須藤氏は、明治45年以来農業に従事し、昭和10年から部落農業増産班長として、農業技術の向上に努め、食糧管理制度施行下には常に130%から200%の供米を行なつたほか、特に健苗育成のため苗代位置の選定、防風しよりの設置と共同催芽室の設置を普及させている。また、客土による酸性の中和、施肥の合理化、選種の改善、ビニール畑苗代の導入等技術の研さんに努め、その成果を逐次座談会等や現地説明により地域住民の指導にあたられるなど、健苗育成技術の向上と稲作の増収に尽くされ、本県農業の振興に貢献された。



俳句と短歌の

普及指導

石 田 玲 水

(60才)

現住所 秋田市

石田氏は、八郎瀧町一日市に生まれ、
五城目町準教員養成所を卒業、船越小
学校、一日市小学校に勤務されたが、

20才のころ、一日市在住の島山林閃鳥に師事して俳句を学ばれたが、その後、玉川学
園教育大学部に入学し、卒業後は、金足西小学校に勤務し、かたわら村内有志と俳誌
「白日」を創設、発刊部数 150 部 260 号を数えるにいたっている。また、和歌はあら
らぎ系「潮汐」（鹿児島寿蔵主宰）の同人として活躍、昭和25年県内誌「寒流」を発
刊、月刊紙として210号（350部）を数えるにいたった。さらに自作の歌集「幾朝」
を昭和31年に発刊するなど後進の指導に尽くされ、本県の俳句ならびに短歌の普及発
展に大きな貢献をされた。